

あるパーネル挽歌

—イエイツと一八四八年—

佐 野 哲 郎

一九世紀のアイルランドの政治風景を二分する二人のカリスマ的人物がいる。前半を代表するのがオコネル (Daniel O'Connell, 1775-1847) であり、後半を代表するのがパーネル (Charles Stewart Parnell, 1846-1891) である。前者はカトリック解放と合同令撤廃のために大衆運動を組織し、〈解放者〉と呼ばれ、後者は土地問題と自治法案にかかわって、イギリス議会で活躍し、〈無冠の帝王〉の名をほしいままにした。彼がいかにカリスマ性を發揮したかは、ジョイスの『若い日の芸術家の肖像』や、『蕪の日の委員会室』に描かれている。イエイツはオコネルをきらってさんざんにこきおろしたが、パーネルの生涯には、一個の悲劇的英雄像を見るに至った。一八九一年一〇月にパーネルが死んだ時、イエイツは四日後に発行されたパーネル派の機関紙 *United Ireland* に、次の詩を寄せた。

Ye on the broad high mountains of old Eri,

Mourn all the night and day,

あるパーネル挽歌

The man is gone who guided ye, unwearied,
Through the long bitter way.

Ye by the waves that close in our sad nation,
Be full of sudden fears,

The man is gone who from his lonely station
Has moulded the hard years.

Mourn ye on grass-green plains of Eri fated,
For closed in darkness now

Is he who laboured on, derided, hated,

And made the tyrant bow.

Mourn—and then onward, there is no returning

He guides ye from the tomb ;

His memory now is a tall pillar, burning

Before us in the gloom! ①

いにしえのエリの国の広大なる山頂に立つ者よ

日夜をわかず今こそは嘆け

遙かなる苦難の道を倦むことなげく

君たちを導いた人は去った

悲しみのわれらが国の水際近く立つ者よ

今こそは恐れおのけ

孤独の座より苦しみの歳月を

培いきたった人は去った

呪われたエリの国の緑濃い野に立つ者よ嘆け

嘲けりと憎しみの中に

力尽くして暴君を屈せしめたその人は

今は闇に包まれてしまった

嘆け——そして進むのだ 返す道はもはやない

かの人は墓場から君たちを導く

そのおもかげは今や高い柱となって燃え

闇を行くわれらの前を照らすのだ

イエイツはなぜこのような詩を書いたのだろう。いくら初期のイエイツとはいえ、すでに長詩「アシーンの巡礼」を発表して、確かな地歩を固めていた詩人が、どうしてこのような空疎で抽象的な言葉をふんだんに使った扇動的な詩を書いたのだろう。もちろん、イエイツはこの詩を以後のいかなる詩集にも載せはしなかった。それはそれで納得はいくのだが、やはり、もう少しイエイツの心情を探ってみたい気がするのである。つまりそれによって、イエイツのナシヨナリズムのそもその初めのところが明らかになるのではないかと思うのである。

それまでのイエイツのパーネルへの言及は、ごく少ない。また、所詮権謀術数の世界に生きる人間として、遠目に見ている感がある。当時の発言を収録したものとして現在われわれの手に入るものは、書簡集と、『未収録散文集』(*Uncollected Prose*)と『新大陸への手紙』(*Letters to the New Ireland*)とである。ウェイド(Allan Wade)の書簡集で見ると、パーネルの名前は、彼の死の以前には、一八九一年一月のオリアリー(John O'Leary, 1830-1907)あての手紙にあるだけだが、実は、一八八九年二月のタイナン(Katharine Tynan)あての手紙にも、間接の言及がある。それは、パーネルの手紙を偽造したピゴット(Richard Pigott)について述べており、「かわいそうなピゴット、ああまで明らかに嘘をつかれてみると、むしろあの男が好きになりますね」といった調子のものである。『新大陸への手紙』は、一八八九年から一八九二年にかけてイエイツがアメリカの雑誌に書き送った文章を収めたものだが、パーネルの名は三度出てくるだけで、とくに重要な意味はない。『未収録散文集』でも、無意味な言及が一八九〇年に一度あるだけで、あとはこれから引用する死の数日前に *United Ireland* に寄稿した一文となる。元来この新聞はパーネルが政敵の手から強引に奪い取ってわがものとしたもので、イエイツはこれの一八九一年七月一日号に始まって、八月二二日、九月一二日、九月二六日号と、これまでに四度寄稿しているが、いずれも政治的な発言はほとんどなく、主題はもっぱら文学である。この論文でも、各地域の青年アイルランド(Young Ireland)の組織を合同して一つの文学会を作ることを提案した。そしてこう言っている。

イギリスの新聞によれば、われわれはパーネル氏を支持する過激派ということになっている。(中略)総選挙も、ホーム・ルールの実施すらも、われわれの仕事を不要にするものではない。なぜなら、われわれの敵は無知と偏狭と狂信であるからだ。これらは人類の永遠の敵であって、議会の法令によって廃止されうるようなものではない。^①

イエイツは政治に無関心では決してなかった。しかし、政治の現実相と文学の永遠相とを区別する姿勢がつねにあつて、それがこの一文のようなどこか距離を置いた口調となつて表われているのである。ところがそのわずかに一週間後、つまりパーネルの死後四日、一〇月一〇日付の同じ新聞に、さきの詩が掲載されたのである。

イエイツがこの詩を書く契機となつたのは、言うまでもなくパーネルの死である。パーネルはオシェイ夫人という女性と十年間同棲を続けていたが、一八八九年の末になつて、夫人の夫のオシェイ大尉が突然パーネルを共同被告として、離婚訴訟を起こしたのである。翌年の一月になつて、パーネルに責任がある旨の判決が出た。はじめのうちはパーネルに忠実だった配下の議員たちも、ホーム・ルール法案に好意的だったグラッドストンの警告に動揺して、数日におよぶ議論ののち、半数以上がパーネルの許を去つた。パーネル自身は失脚を認めず、なおも活動を続けたが、疲労が重なつて、翌一八九一年一〇月に死んだ。イエイツにとってはそれまで一定の距離を置いて見ていた人物が、死によつて変貌したのである。死に至るまで屈しなかつた誇り高い英雄的な指導者に。そもそもアイルランドの歴史は、象徴的な死者には事欠かないのである。クロンターフの戦いに勝つてデーン人を追い落としながらみずからも命を落としたブライアン・ボルー、クロムウェルの軍勢と戦つて毒殺されたというオウエン・ロウ・オニール、一七九八年の蜂起の立役者ウルフ・トーン、「アイルランドが国家となるまでは私の墓碑銘を書いてはならない」という有名な言葉を残して一八〇三年に処刑されたロバート・エメット。そのうえ、このような変貌は、のちのイエイツにとっては珍しいことではない。死者に思いをはせ、死後の世界に想像をめぐらせる作品のいかに多いことか。まことにイエイツは死にとりつかれた人間であつた。

All, all are in my thoughts to-night being dead.

今宵は皆が思い出される、死者であるゆえに

とらう “In Memory of Major Robert Gregory” の一行は重要である。この詩においてイエイツはライオネル・ジョーンソン (Lionel Johnson) ‘J・M・シング (John Middleton Synge)’ ジョージ・ポレクスフエン (George Pollexfen) らの死者を数え上げ、最後に、戦死したばかりのロバート・グレゴリーを呼び出して、聖列加入の儀式を行なうのである。死者たちはそれぞれに一定の意味を付与される。彼らは死によって無に帰したのではなく、一個の規範と化したのである。

And now their breathless faces seem to look

Out of some old picture-book.

いま彼らの息を失った顔がのぞいている

古い絵本からのぞくように

という絶妙の二行は、それを物語っている。この “breathless” という語は、その次の行で “lack of breath” となつて繰り返される。“Byzantium” にも同じような表現があるが、私はこのような語句は生者と死者の違いを表わす言葉でありながら、同時に両者の間のある意味での連続性を暗示していると思う。あまりにも生々しく、視覚的な表現であるからである。それはさておき、死による変貌というモチーフが最も端的に表われているのは、言うまでもなく、“Easter 1916” である。

Yet I number him in the song ;

He, too, has resigned his part

In the casual comedy ;

He, too, has been changed in his turn,

Transformed utterly :

A terrible beauty is born.

それでもわたしはこの男を歌おう

この男もまた降りたのだ

日々のおどけ芝居の舞台から――

この男にも変わる時が来たのだ

完全なる変貌の時が――

恐るべき美が生まれたのだ

呑んだくれのうぬぼれやと思っていた男に悲劇的な死を遂げられてみれば、イエイツもしぶしながら、その変貌を認めないわけにはいかないのである。イエイツがパーネルへの挽歌を書いたのは、こういう姿勢の早い表われであった。

しかし、これだけでは、まだ半分しか説明したことにはならない。つまり、この詩のトーンが説明されていないからである。私はイエイツにこのようなトーンの詩を書かせたのは、デイヴィス――オリアリー――イエイツ

と続く青年アイルランドの流れであると思う。そして、その流れの中の象徴的な年として、一八四八年をあげたのである。イエイツをナショナリストにしたのがオリアリーであることは、これはもう間違いないところである。彼が一八六五年に捕えられ、五年の牢獄生活と一五年の国外追放を終えて帰国し、イエイツにアイルランドの歴史や文学の書物を貸したり与えたりしたことについては、自叙伝その他で多く語られていることでもありここでは言及にとどめる。ただ見落としてならないことは、オリアリーがイエイツに与えた影響の最大のものがその人格主義であったということである。オリアリーは過激派のフェニアン党员であったが、つねに〈人間〉を政治的行為よりも重視していた。「たとえ国を救うためであっても、人間にはしてはならないことがある」という彼の発言は、私の気付いただけでも、一八九七年の論説に始まって、一九三六年の手紙に至るまで、六回もイエイツが引用している。詳しく調べればまだあるかもしれない。ただしこれは道徳的な立場ではなく、一個の人間の全人性への信仰のようなものであって、これはイエイツの「文学は個人の問題だ」という発言と重なるものであるし、イエイツが抽象をきらったこと、のちに貴族主義的な傾向を強めたことともかわりがあるし、さらには、イエイツの神話の創造にもかかわってくることなのである。

さて、そのオリアリーをナショナリストにしたのがデイヴィス (Thomas Davis, 1814-1845) であった。青年アイルランドの党首として絶対的な権威と信望を得ていたデイヴィスが三一歳の若さで死んだ時、その後継者は三人いた。マルカム・ブラウンによれば、デイヴィスの実的な面を受け継いだのがダッフィー (Charles Gavan Duffy) であり、戦闘的な面はミッチェル (John Mitchell) に受け継がれ、貴族的な傾向は、オブライエン (William Smith O'Brien) が受け継いだ。しかし、その文化的な側面の後継者はなく、それは四〇年後のオリアリーを待たなければならなかったのである。オリアリーが一八八六年に発行した *What Irishmen Should Know* という小冊子に

は、アイルランド人が読むべき書物や作家が列挙してあって、その中心をなすのがデイヴィスであり、次いでミツチェル、さらにはダッフィーであったという^④。またイエイツ自身も、オリアリーが愛国者になったのはデイヴィスの詩を通じてであったと言っている^⑤。

これでデイヴィス、オリアリー、イエイツの三人の線はつながったが、イエイツのデイヴィスに対する評価はどうか。一般には、これは高くなかったとされているが、それはイエイツがあとで書いた自叙伝などを見るからそう思われるのであって、こと初期のイエイツとなれば、決してそうではないのである。例によって、『未収録散文集』『書簡集』『新大陸への手紙』における当時の言及を調べてみれば、少なくとも一八八六年から一〇年間は、まったくと言ってよいほど、デイヴィスへの批判めいた言及はない。イエイツが最初に書いた評論は、ファーガソン (Samuel Ferguson) 論 (I, II, 一八八六) である。ここでイエイツはすでにデイヴィスに言及している^⑥。

「アイルランドの」国民はデイヴィスに戦いの雄たけびを見だし、マンガンに絶望の叫びを見だした^⑥。

“To Ireland in the Coming Times” (1892) にあって

Nor may I less be counted one

With Davis, Mangan, Ferguson.

デイヴィス、マンガン、ファーガソンらと

願わくは、肩を並べて

ある。パーネル挽歌

と歌ったことはよく知られているが、この三人組が最初の評論にすでに顔を揃えていることに注目したい。この翌年には、ダッフィーが編纂したアイルランド詩集の中ではこの三人が抜きんですぐれていると言っているし、また、国民に読ませるべきアイルランド詩人を列挙する時には、必ずデイヴィスの名をあげている。彼の政治詩についてやや批判めいたことを言っている以外は、はっきりとした批判は、一八九六年まで見られないのである。^⑥ それでは、イエイツはデイヴィスをどのような点で評価したのか。それを知るためのよい例は、やはりマンガンと比較した次の一文である。

マンガンは不幸であったがゆえに書き、デイヴィスは幸福で高潔であり、かつ他人をもそのようにしたいがために書いた。^⑦

ファーガソンはアイルランドの過去を見、デイヴィスはその未来を見たといエイツが言うように、デイヴィスは多くの革命家に見られる真の樂觀主義に貫かれていたのである。その根底にあるものは、正義は必ず勝つという信念であった。したがって、アイルランド解放のためには、武器を執って戦うというのは、自明のことであった。イエイツはそれに共感を示す。

……文学がなければ国民としての自覚はない。国民としての自覚がなければ文学はない。その昔デイヴィスが歌った頃には、それを教える必要はなかった。当時アポロは矛の先で堅琴を奏でたからである。しかし今では矛も堅琴も、海へ投げ込まれてしまった。^⑧

これとオリアリーの次の言葉を重ね合わせてみよう。

私の宗教は、古代ペルシアのものだ。弓を引きしぼって真実を語るのだ。^⑩

ここへさらに、イエイツの初期の短編の一つである“The Crucifixion of the Outcast”の文章を重ねてみよう。

おお、卑怯者、圧制者の坊主ども、詩人と歌うたいの迫害者ども、命と歓びを憎む者ども、剣を抜いて真実を語ることをせぬ連中め。^⑪

ここにはきわめてロマンティックな人格主義がある。思想と行動の一致への志向がある。このような理想的状況を実現したのが一八四八年だと、イエイツは考えたのである。

四八年の運動を特徴づけている政治と文学の結合によって、ナショナリズムの信条を教えた詩人や散文作家たちは大変な人気を得たので、それ以後私たちは、この時代をわが国の文学活動の盛んであった唯一の時代と考えるようになった。^⑫

ではその一八四八年とは、どういう年であったのか。年表などには青年アイルランドの反乱と記されているが、それは決して華々しいものではなかった。機関誌『ネイション』は公然と武装蜂起を呼びかけたが、アイルランドには金も武器もなく、指導者もいなかった。ミッチェルはとらえられ、ダッフィーも捕えられた。ティツペラリーでの蜂起が決まって、オブライエンが送り込まれたが、彼は戦術的には信じがたいほど無能であった。結局は同年七月にある土地で警官隊との小ぜりあいが行なわれて、農民が二人死亡し、反乱隊はたちまち蹴散らされてしまった。その翌年にも反乱が計画されたが、ここでもまた主だった者たちが逮捕されて終わった。その逮捕者の中には、一九歳になったばかりのオリアリーもいたのである。

また、文学においても、この年がイエイツの言うような盛況を呈したとは考えられない。イエイツがあげているのは、カールトン (William Carleton, 1794-1869) であり、ラヴァー (Samuel Lover, 1797-1868) であり、リーヴァー (Charles James Lever, 1806-1872) である。彼らがナショナリストであったとすれば、それは、アイルランドに題材を求め、アイルランドの生活、人間を描き出そうとしたところにあると言わなければならぬ。カールトンの場合は、たしかにそのことが言えるし、とくに自分がその出である農民の言葉をみごとに映し出したという功績は認められるだろう。しかし、ラヴァーやリーヴァーとなると、問題は異なる。彼らはむしろアイルランド人の特徴を誇張して描き、商品としてのアイルランド人、すなわち、あの悪名高いステージ・アイリッシュマンを生産したのであった。イエイツ自身も同じ年に別の雑誌に寄稿した論説では、この二人は半分ロンドンに目を向けていると言っているのである。どうもイエイツは、『ネイション』に熱烈な愛国詩を寄稿していたレイディ・ワイルドの文章などに幻惑されて、この二人の名をあげたのではないかと思われるふしがある。いずれにせよ、イエイツはこの一八四八年という年にこだわっていたようで、一九〇九年の日記に、こう書いている。

「人の行為に」いやしい動機を探ろうとする連中は、スミス・オブライエンが失敗した時に、政府から金をもらってわざとやったんだろうと言った連中の子孫だ。「いつもアイルランド人は、高貴な鹿を引きずり倒す猟犬の群れのように見える」とゲーテが言ったのは、こういう連中のことだ。^⑭

実はこの言葉は、パーネルが死んだ時にアイルランドの新聞が引用したものと、『自叙伝』にはある。^⑮つまり、今引用したのは『自叙伝』(Autobiographies)の草稿として一九七二年に出版された *Memoirs* からだが、『自叙伝』においては、オブライエンとパーネルの二人に関して、このゲーテの言葉が二度引用されているのである。

これで一八四八年とパーネルとの結びつきは、いっそうはつきりしたものとなった。

イエイツがこの年にこだわった理由は、一八四八年という年の意味を、全ヨーロッパ的な規模で考えて初めてわかると言えるだろう。ヘナシヨナリズムの世紀と呼ばれる一九世紀において、この年は「革命の年」と言われるほど、各地で旧体制をくつがえすような事件が相次いで起こった。

それはヨーロッパのほとんどすべての国や地域や民族が、紛争と反乱、革命と戦争のなかに巻き込まれた年であった。それによってヨーロッパは傷つき、ヨーロッパは変わり、ヨーロッパはよみがえった。北はアイルランドから、南はシチリア島にいたるまで、西はスペインから東はポーランドにいたるまで、いたるところで反乱が起り、政權が交替し、弾圧があり、戦火が交えられた。^⑩

イタリアでは、一月にパレルモで起こった反乱が全土に波及したし、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、ポーランド、チェコ、スイスなどでも、さまざまなかたちでのナシヨナリズムの運動が燃えさかった。最も華々しかったのはフランスであった。二月革命によってルイ・フィリップは王位を追われ、第二共和政が誕生する。そして、やがてその首班の座に就いたのは、ロマン派の詩人として出発したラマルティエヌであった。これは一九世紀のナシヨナリズムがロマンティズムと結びついていたことを象徴するような事実である。実は、アイルランドの反乱もほかの多くの例に見られるように、フランスの刺激を受けて起こったのであった。デイヴィスの死後、急進論と穏健論が対立して、後継者たちは態度を決めかねていたのだが、二月革命の報が伝わると、たちまちにして急進論が優勢となって、さきの『ネイション』の呼びかけを生んだのである。オブライエンはみずからパリに赴いて、ラマルティエヌに援助を求めた。これはイギリスのおどしに屈したラマルティエヌの容れるとこ

ろとはならなかったが、国中が独立への希望で沸き返ったのであった。

詩人が革命運動の先頭に立った例としてはポーランドのミツキエヴィッチがあるが、一八四八年に関連して、また本論の文脈に関連して最も注目すべきは、ハンガリーのペターフィの場合だろう。彼は一八四八年三月のオーストリアに対する蜂起の際に、自作の詩「起てマジヤル人」を民衆の前で朗読した。

起てマジヤル人 祖国は呼んでいる

いまこそ奴隷の鎖をくだけ

自由の民たるか 永遠の奴隷たるか

マジヤル人よ いまこそを決するとき

マジヤルの神 天にあり

忠実に誓わんかな

おごそかに誓わんかな

われらもはや暴君の桎梏を負わじと

ああ今日までのながき奴隷の生活

わが父祖はその墓にしあれど

自由の郷土に眠れるにはあらず

自由に戦い死せるもいまは空しかり

さあれ マジヤルの神は天にあり

・ ・ ・

(今岡十一郎訳)

革命詩に共通の高揚した理想主義的なトーンはデイヴィスにも見られるものである。デイヴィスの有名な "Nation Once Again" の前半を引用してみよう。

When boyhood's fire was in my blood,

I read of ancient freemen,

For Greece and Rome who bravely stood,

Three Hundred men and Three men.

And then I prayed I yet might see

Our fetters rent in twain,

And Ireland, long a province, be

A Nation once again.

And, from that time, through wildest woe,

That hope has shone, a far light ;

Nor could love's brightest summer glow

Outshine that solemn starlight :

It seemed to watch above my head

In forum, field, and fane ;

Its angel voice sang round my bed,

“A Nation once again.”

少年の火のわが血の内に燃えし頃

いにしえの自由の民を知りぬ

ギリシアとローマを守り雄々しく立てる人ら

かれは三〇〇　これは三人

われは祈りぬ　いつの日か見せたまえ

われらが足かせの二つにさけて

長き月日を一地方たりしアイルランドの

ふたたび国家となる日をと

その日より　狂乱の苦しみの時にも

そのぞみは　はるけき光と輝き

夏の日の光まばゆき愛の火も

のぞみの星の森厳の光には及ばざりき

そはわが上を見守るごとく

広場を野を神殿をおおい

その声は天使さながら　わがふしどをめぐりて歌いぬ

「ふたたび国家となる日を」と

ともに事実上の国歌として一般に歌われたという点でも、この両者は何と共通していることか。「起てマジアル人」を朗読したベターフィは反乱軍の先頭に立った。そして翌年に戦死した。これがイエイツにどれほど訴えた

かは、これまたのちの詩集には収められなかった初期の作品に“*How Ferencz Renyi Kept Silent*”という詩があり、その副題に“*Hungary, 1848*”とあるのを見れば明らかだろう。

一八九〇年代は、イエイツがいろいろな意味での実行的な行動を最も多く行なった時期であった。とくに政治と文学の一致を目ざして活動した時期であった。これには一八八九年にモード・ゴンと相識ったことが大きくあずかっているだろう。パーネルの死は彼の訴訟事件によって大きくゆらいだアイルランドのナショナリズムへの警鐘であり、イエイツにとってはまたとないシンボルであった。そしてこの詩はデイヴィスのみならずペターフイにも伍することをひそかに夢見た実験的作品であったのかもしれない。イエイツの政治的実践活動は、一八九八年のウルフ・トーン百年記念祭のイギリスでの実行委員長となったことを頂点として、急速に勢いを失い、あとは演劇活動に重点が移ることとなる。そして、ふたたびパーネルを歌った詩“*To a Shade*” (1913)を書いた時、そのトーンは一変していた。やがて“*Parnell's Funeral*” (1933)、“*Come Gather Round Me, Parnellites*” (1936)などの詩が書かれることになる。これらの詩のトーンの変遷の中に、イエイツのナショナリズムの変貌の重大な鍵があると私は考えているが、それについては、また稿を改めなければならない。

注

- ① Richard J. Finneran, ed., *W.B. Yeats: The Poems, A New Edition* (London, Macmillan, 1983), pp. 528-29.
- ② Allan Wade, ed., *The Letters of W.B. Yeats* (London, Rupert Hart-Davis, 1954), pp. 112-13. なぞひれば、アイランド事務大臣のフレデリック・カヴェンディッシュが、一八八二年五月、フェニックス・パークで次官とともに暗殺された事件に関するものである。公には遺憾の意を表したパーネルが実はこのテロ行為を是認する手紙を出していたことを、一八八七年四月になって、タイムズ紙が公表したが、これはビゴットの偽造したものであることが判明した。

- ③ John P. Frayne, ed., *Uncollected Prose by W.B. Yeats*, I (New York, Columbia U.P., 1970), p. 206.
- ④ Malcolm Brown, *The Politics of Irish Literature* (Seattle, Univ. of Washington Press, 1972), pp. 85-88, p. 15.
- ⑤ W.B. Yeats, *Autobiographies* (London, Macmillan, 1956), p. 95.
- ⑥ *Uncollected Prose*, I, p. 90.
- ⑦ *Ibid.*, pp. 146, 152.
- ⑧ *Ibid.*, p. 408.
- ⑨ *Ibid.*, p. 157.
- ⑩ *Ibid.*, pp. 224-25.
- ⑪ *Autobiographies*, p. 211.
- ⑫ W.B. Yeats, *Mythologies* (London, Macmillan, 1959), p. 149.
- ⑬ *Uncollected Prose*, I, pp. 215-16.
- ⑭ W.B. Yeats, *Memoirs* (London, Macmillan, 1972), p. 163.
- ⑮ *Autobiographies*, p. 316.
- ⑯ 河野健二『現代史の幕あけ』（岩波新書、一九八二年）三頁。